

佐々木亨「産業遺物の保存と博物館」

三井金属修史論叢書第十号、一九七八年三月

産業遺物の保存と博物館

佐々木 亨

一 産業考古学のこと

今年（一九七七年）二月一二日に、「産業遺跡、技術記念物の調査、記録と保存」及びそれに関連した研究活動の推進を目的として産業考古学会が創設された。昨年春頃から、青木国夫（国立科学博物館）・大橋周治（新潟大学商業短期大学部）・玉置正美（亜細亜大学）・山峻俊雄（広島大学）氏らを中心に話し合いがすすめられ、数回の準備会と研究会を重ねたうえで早大での発足創立大会に漕ぎつけられたものである。私は夏頃から世話人会にくわえられ、比較的早くからこの新しい学会の創設に参画する機会を得た。私が招かれたのは、以前から近代日本の技術史研究に関心をもってきた一人だからということのようであった。もちろんこの企画には心から賛同できたから喜んで参加した。

数年前、近代日本の鉱業発達史上逸することのできない人物の一人である和田維四郎に関する小伝を何とかまとめたが、そのあと、鉱業技術者たちによく知られている渡辺渡に關しても伝記がまとめられていないことを知ってこれにも手をつけ始めた。思うように資料が集まらなくて逡巡していた頃、三野英彦博士の強いお勧めもあって『日本鉱

業会誌』に書くことになり、その必要から渡の子息の渡辺仁氏にお目にかかったことがあった。仁氏は既に八〇才を越えておられ、耳もだいぶ遠くなっておられたので、夫人に同席していただいている話をうかがった。同氏の訃に接したのは、そのあとまもなくのことだった。

仁氏については、お訪ねした頃の私は、迂闊な話だが東京帝大出の建築家だということ以外には何も知らなかった。どういう建築家なのか調べずに出かけたのである。東京帝室博物館(いまの東京国立博物館)や敗戦後GHQのおかれていた第一生命館の設計者として聞いた著名な建築家であったことを、亡くなられてから知ったのである。渡辺仁という名前は、調べてみると、高度に専門的な建築史の書物でなくても、工業高校の建築科で使う教科書程度の書物ならば、一時期の傾向を代表する日本の建築家の一人として、必ずといってよい程に登場するのである。もし初めからそうと知っていたら、もっといろいろなお話をうかがうのだったのにと悔んだのであった。

自分が会ったことのある建築家の作品だという心づもりと、ある程度の解說的な知識をもって建物を眺めてみると、第一生命館と東京国立博物館とは、二つとも、深い印象を残してきた建築物であることが改めて想起され、その印象がじつは建築家の個人的な主張にかかわりあっていたこと、とりわけ東京国立博物館に向って立つ時に受ける一種異様な感想はそこに一時期の、つまり昭和一二(一九三七)年という一つの転換期といふべき時代の思想の一面の反映をみているのだというように考えるようになった。そして、この些細なことから、日頃何気なしに見ている殆ど無数の白亜のビルディングの一つ一つにも、個性があり、時代の反映をとおした主張があるのだというように考えるようになるようになった。ちょうどこの頃から起きていた明治期に建設された著名な建築物を保存しようという運動の意味も、私なりに理解できるように思われてきたのであった。つまり、そこには、古いものを残そうといういわばたんなる懐古趣味以上のもの、当該の時代に生きた人々の精神の反映があるからであり、その一面を強烈に主張する作家

の魂をつかもうとするいわば歴史感覚があるからだと思われるのである。そうでなければ、考古学的な古い時代のものでもなく、古代・中世のものでもない近々数十年前に建てられたものを調査し遺そうなどということが、専門家を越えた運動になったりするわけがないとも思うのである。

こうしたことは、美術品についての見方、評価に通ずるものがあるのだが、そして産業考古学の考え方の中には個々の作品を大切にしようとする点で美術品の扱い方に一脈通じる点があるのだが、それはあくまでも一面であって、産業考古学の考え方や運動は美術史ではない。産業考古学は近代の産業上の遺物・技術記念物等を調査・保存しようとする。それには遺そうという機器や記念物に個人的なものを認めるからという考え方もあることもたしかであるが、それらが美術品として作られたものだからというのでは決してない。あえていえば、むしろ建築物などよりもっと大量につくられた製品や道具・機械・装置類の、いわば当該の時代にはありふれた無名のもののなかに、当該の時代に生きた技術者や職人達の個人的な主張をみようとするのである。そういう意味でいえば、産業考古学の考へ方は、美術よりむしろ民俗学の考へ方に共通するものがあるのかもしれない。民俗学の考へ方を、民俗学が手をつけようとしなかった近代的な鉱工業生産という分野に押しひろげようとする性格をもっているといえるかもしれない。(じっさいあとうかがったところでは、産業考古学会の初代の幹事長となつた玉置氏は、民俗学の方面にもかなりの関心をもっている由であった)

近代の鉱工業生産は大量生産を前提とし、また多数の同種企業が競争的に存在するのが常であったためか、その生産物や生産に要する施設や機械装置を個人的なものとしてみる習慣は一般的にはなかった。少なくともごく最近まではそうであった。一九五〇年代の後半から六〇年代一ぱい続いたいわゆる高度経済成長が一息ついたところで、人々はようやく、この時期に、いたるところで近代の産業上の遺物、技術上の記念すべき施設や機械装置類が破壊され、

失われてゆくことに気づいたのであった。いいかえれば、数が少なくなりあるいはなくなってしまう途上で、ようやくそれらのなかに個性的なものが少なくなかったことを知ったのである。イギリスにおいて、産業考古学 Industrial Archaeology——産業上の遺物・技術記念物に関する調査、保存の運動が起ったのが一九六〇年代の後半、全国的な規模の学会が成立し専門誌が出されるようになったのが一九七〇年代といわれるから、右の傾向は、ひとりわが国に限られたものではなかったとみられる。わが国の場合については、後述のべるように、古い建築物に関する調査・保存の運動が一步先んじているようである。建築物のほうも、それを個性的なものとみる習慣が以前からあったためであろう。しかし、鉱工業生産の技術の分野でも、それこそあつというまに無数の施設や機械が失われ、同類のものが殆んどなくなってしまったとか希少なものになってしまったという段階になって、人びとはそれらの一つひとつが時代の精神を反映した個性的なものであることに気づいてきたのである。従来は、近代的な生産あるいは「大量生産」はいわば「無個性」と等しく扱われる傾向が支配的であったのに、この近代的な大量生産のなかに個性が埋没させられていたことに気づかれるようになったと云ってもよいであろう。もちろんこのような自覚は、残念ながら、まだまだ弱いものではあるが。

ところで私は、右において、「近代の」産業上の遺物とか、「古い」建物という云い方をしたが、産業考古学的観点からいえばこの「古さ」は大いに問題になる。従来は考古学が、文字文化発生以前あるいは文字文化発生の初期というような「古い」時期に関心を集中してきたことはよく知られている。また、ある作品なり建造物なり遺跡なりを公共的あるいは学問的に文化財と認める場合に問題となる「古さ」は、はっきりそう定義されていたのではないにしても、明らかに「近代」以前にひとつの基準がおかれていたように思われる。これにたいして、産業考古学的観点から問題となる「古さ」は、「近代」もつと簡明に言えば産業革命以降という時期を想定している点に一つの特徴がある。

少なくとも産業考古学の発祥の地イギリスではそうであったようである。それだけに、産業革命以降というような時期を対象とする学問を考古学 Archaeology などということが適切であるからという疑問も出されたといわれるが、イギリスの場合については、近代産業上の遺物の調査、保存をめざす運動が先んじていて、学問の名称については問題点がとり残されたまま、学会あるいは運動の名称として定着しているようである。わが国の場合の事情は、むしろ複雑である。あるいはイギリス等においても同様なのかも知れないが、主たる関心の対象を産業革命以後の近代鉱工業の遺物・技術記念物ということに異論はないのだが、近代以前の、もう少し正確に言えば近世の産業上の遺物(いまでは「遺物」だ)でも明治・大正、場合によっては昭和期にまで稼動していたものが少なくないので、これらを中心として除外する理由はないというのである。産業考古学会創設準備の過程での議論のひとつであるが、もちろん定義すれば解決する問題ではなく、産業考古学的な研究の進展がおのずから明らかにするであろう問題である。

二 明治村と江戸村

産業遺物の調査保存をめざす運動が全国各地にあって、その各種各様の運動の連絡協議組織があるというような事態が想定されるとよかつたという気持がいまも消えない。じつさい、イギリスではそういう経過を辿つたらしい。これにたいして、わが国における産業考古学的な関心が、学会というそれなりに既成のイメージをもつ一つの用語でしめされる組織という形態をとおして種をまかれたことの善悪は、後述の歴史家の判断にゆだねるしかない。問題の緊急性からいえば早すぎたとはいえないが、必要なだけの機を熟すための根まわしがなされたかどうかというようなことも冷静に検討されねばなるまいと思う。産業考古学会という組織が生れて半年そこそこにはかならない時期に未来を予測することはできない相談だが、若干の科学史研究者ないし科学史に関心をもっている人を別とすれば、技術の

ことに一番詳しい筈の技術者・工学者、そして何よりも企業のなかにいる人の参加の少ないことは、やはり気にかか

る。
遺物・記念物(記念するに値するものという意味)の調査・研究・保存というような仕事は公共の博物館の仕事であって少しもおかしくないとは思う。しかし、その方面の専門的知識をもち合わせない私は正確なことをいうことはできないが、少くとも今日の段階では、公共の博物館では、このような産業考古学的な方面に手を伸ばすことはなかなかむづかしいらしい。正当な仕事として位置づけられていないということでは必ずしもなく、要求が少なく、いつてみれば機が熟していないということらしい。しかし、機が熟するのを待っていたら、気がついてみたら、遺すべきものがすっかりなくなっていたという結果になりかねないのがこの分野の特徴である。こういう点で、日常の仕事として技術に直接にたずさわっている人々の参画が望まれているのである。また、軍事、国有鉄道、電気通信などごく限られた分野、明治初期の若干の官業を除くと、近代産業の圧倒的な部分は私企業として発達して今日に及んでいるのであり、したがって現存する産業上の遺物・技術記念物の圧倒的な部分が私企業のもとに眠り、あるいは明日廃棄されるかも知れない運命のもとに、今日なお稼働していると思われるのである。

もちろん、こうしたことに今まで誰も気づかなかつたのではなく、文字通り心ある人々の手で、産業考古学などということばが生れる以前から、僅かずつではあるが、産業考古学的な仕事すすめられてきたことは知られている。国立科学博物館、交通博物館、通信総合博物館のような若干の大規模な公共的な博物館の活動を別とすれば、今日でも最も知られているのはおそらく博物館明治村であろう。

昭和四〇(一九六五)年三月に開館し、いまでは参観者は年間百数十万人に達しているというから、特別に述べることもないが、若干のことは記しておきたい。

博物館明治村の一大特色は、明治期に(ほんの一部分の例外的なものが大正期に)建設された建築物を一箇所に移転し、保存し、一般の観覧に供していることである。保存の対象が建築物であるから、他の多くの博物館のように「一堂に集めて」というわけにはいかない。名古屋鉄道が犬山市にもっていたざっと百万平方メートルという土地を提供して創設された博物館なのである。今日ではそれぞれ特色のある約五〇件の建造物が移築され、また京都市電と明治二八年製の蒸気機関車(これらは場内を稼働して人気を博している)、蒸気自動車、それに若干の機械類を集めている。

この壮図は、建築家であり現館長の谷口吉郎氏の三〇年来の念願と名鉄社長だった故土川元夫氏の誠意と努力の結果といわれる。この大規模な博物館が(財団法人ではあるが)公共の施設として創設されたものでないことは(ほんの一部の建築物については移転費の補助があったとはいわれるが)、国の文化政策の貧困さをしめしているが、それだけにこの試みは現代の産業者の壮挙として賞賛に値しよう。

明治村の建築物の一つ、鉄道寮新橋工場は機械館と名付けられ、原動機八種、工作機械十種、繊維機械一八種、印刷機械五種、製陶機械その他若干が展示されている。製陶機械と若干の繊維機械は時期が明記されていないが、おそらくは近世以来のもので、他はすべて明治期の製作にかかるといえる。このほか、明治一二年に建設された三重県庁舎内に、各種の古い時計等が展示されている。これに市電車輜、機関車をくわえたものが、建築物以外の産業上の遺物のほとんどすべてである。機械類のなかには珍しい貴重なものも少なくないが、明治村は何といつても建築物の博物館なのであって、明治村に産業考古学のすべてを求めるわけにはいかないのである。その意味では、明治村自身がそう云っているわけではないが、明治村はあくまでも近代の建築物という分野についての産業考古学的な専門博物館なのである。

なお、よぶんなことだが、明治村関係者の話によると、およそ五〇歳以上の男性に圧倒的な関心と呼び、ある意味で

は最も人気があるのは、名古屋市にあったものを移築した歩兵第六聯隊兵舎(明治六―一八七三)年建設)だそうである。建物の一部に内務班の様子が再現されているので、ここで古年兵にしかられたことを思い出すらしい。就寝のラッパが聞えるようだという人も多いらしい。じっさい、私が参観に行ったときも、老人(?)達がここにくると、にわか大きな声でああだったこうだったと話し出す様子が目撃されたのであった。

軍隊といえば、戦後日本は平和主義の国家になったというこのためか、軍事技術史に関する研究が弱体化しているように思われる。日本科学史学会が編集した全二五巻の『日本科学技術史大系』にもとりたてて軍事技術を扱った巻がない。近代日本の産業や技術の歩みを研究する際、軍事的方面は不可欠の筈なのだが、敗戦に際して廃棄されたものが多く、また平和主義の名のもとに敬遠されたのかもしれないが、現代文化史研究の底が浅くなるおそれがあるという点からみて、残念なことである。産業考古学的関心という点からも同様のことがいえそうである。

つぎに、博物館明治村と似たような企図をもって創設された江戸村について一言しておきたい。

金沢市郊外の湯涌温泉(ゆわぐ)にある江戸村と、江戸村と一体の施設となっている檀風苑については、まだ明治村ほどには知られていないように思われる。一般には「江戸村」と呼ばれるこの施設は、湯涌温泉の旅館である白雲楼ホテルの経営するもので、江戸時代の建築物を移転・保存・展示している江戸村と、江戸村から数百米離れた所にあつて同じく江戸時代の建築物を移築したものであるが、むしろ民俗資料の展示の方に重点をおいている檀風苑とかなり、両施設を合わせて「百万石文化園」と称している。明治村と同様、国の重要文化財、重要民俗資料を多数ふくんでおり、その実体は明らかに博物館である。昭和四二(一九六七)年九月、つまり明治村より二年半程おくれて開村されており、趣旨に共通する点があることなどからみて、明治村開園の影響を受けているのかも知れない。

私は、橋本哲哉氏の示唆で金沢市小橋町にある安江金箔工芸館を参観した後で江戸村に向向いたが、結果からみてこの順序はよかった。安江金箔工芸館(あるいはたんに金箔工芸館)は、金箔の製造販売をしている安江孝明氏の経営する私的な施設であるが、金沢市民にもまだあまり知られてないらしく、市内外の観光案内には通じている筈のタクシンの運転手も知らなかった。金箔工芸館は小さな建物であるが、金箔の製造に関する各種の道具や中間製品、それに写真が展示してある。安江氏としてはこの金箔の製造工程の方よりは、金箔を使った多数の古くからの美術品の展示の方に重きをおいているようであった。それはたしかに見事なものであるが残念ながら私の方にみる眼がない。私としては、金箔製造工程において、均等にたたかなければならないというむつかしさがあることなど、素人でもわかることは別として、箔の製造には一枚一枚の間にはさむ和紙の良し悪しが鍵であること、あの薄い箔の切断は竹のナイフ・エッジでなければならぬこと、ふわふわした箔の張りつけの技法など、安江氏のような工人(名刺には薄師とあった)にしてはじめて語り得ることを興味をもって聴いた。

金箔工芸館を参観したあと、江戸村に行く。白雲楼ホテルの裏手、康楽寺の境内を中心とした約一六万平方米の敷地に、民家を中心とした江戸時代の建築物が総計二五種、移築・展示されている。若干のものを摘記してみると、本陣問屋、本陣土蔵、百姓屋、肝煎級百姓家、長屋門、玉泉院丸なまこ塀、紙漉家、鼓楼、康楽寺山門、康楽寺仮殿、下級武士居宅、在郷商家、大商家、大商家土蔵などが注目される。在郷商家(江戸後期)、本陣問屋(江戸後期)は国の重要文化財に、百姓家(江戸初期)、大商家(江戸中期)は県の文化財にそれぞれ指定されている。ここに来てみると、ほとんど無数にあった筈の江戸時代の百姓屋をわれわれは滅多にみる事ができなくなったことが改めて実感される。古い商家は、地方都市に行くに稀にまだみられるように思っていたが「ごく例外的な社寺や廟を除いて東京の旧区部には江戸時代の建物(住宅や店舗など)が一軒も残っていない」と教えられてみると(村松貞次郎「日本近代建築の歴史」二四三ページ)、文化財に指定しなければ遭らないかもしれない時代の変遷の激しさを改めて感じさせられる。そうい

えば、明治村に移築されている建物では唯一の商家、東松住宅は、明治三四(一九〇二)年に建設されたものといわれるが、これも重要文化財に指定されていた。明治村より規模は小さいが、小さいなりに充実しているといえよう。明治村もそうだったが、博物館では参観者は説明文をいわば読まされるのがふつうである。江戸村の建物にももちろん説明文もついているが、ボタンを押すとテープに吹き込んである説明を聴くことができる。内容もゆきとどいており、漢字だらけの説明文では敬遠してしまう人だって少なくない筈だから、おもしろいくふうだと思った。ただし江戸村では、産業技術に直接関連するのは、加賀藩内にあった紙漉家の建物と若干の紙漉の施設と道具類だけである。

産業考古学的関心の深い人には、江戸村上りも檀風苑の方が充実感がある。江戸時代を思わせる建築物もいくつかあるのだが、こちらの方は移築したものなのか新築したものなのかどうもはっきりしないものが多い。産業考古学的な集取品のおもなものは、辰巳台という建物に陳列されている。

ここには、加賀象嵌せうがんの製作用具、金沢の金箔製造用具、加賀の手漉和紙製作用具があり、この三種とも国の重要民俗資料に指定されている。

さらに、金箔工芸館を先にみてよかったといったのは、ここに金沢の金箔製造用具一〇九種三三二点が陳列されていたからである。これは、昭和四六(一九七二)年一月に国の重要民俗資料に指定されたもので、箔打機、上澄、箔打ち、箔移しの四つの陳列ケースに排列されている。もちろんテープに吹きこまれた通りの説明はあるのだが、予備知識なしで聞いたのではわかるまいと思われたのである。

その指定理由には、

金箔は明治以後、そのほとんどが、金沢でつくられているが、大正四年に、箔打機の導入があつて以後、旧来の用具は急速に滅失を来した。

この収集は、石川県箔工業協同組合の協力を得て、合金・延金・上澄・箔打ち・箔移し等、全工程にわたる用具をとりまとめたもので、質量ともによく備わり、職能の一樣相を示すものとして重要である。

とのべられている。

加賀象嵌製作用具は三二二種三〇〇点で、これも昭和四九(一九七四)年に重要民俗資料に指定されている。製作用具は、1、図案及び型 2 A、素地づくり 2 B、鍛金 2 C、鍛付け線曳き 3、図付け野書き 4、象嵌(A) 4、象嵌(B) 5、仕上げ 6、計測、掃溜の順に六つのショーケースに、びっしりと並べられている。用具の数が多いたのは、同じものを多数並べているからではない。用具によって異なるが、小さなひとつの用具にほんの少しずつ大きさの違ったものがあり、用具によっては何十点にもほっているからである。あの精緻な象嵌細工が、たんに年季の入った技能にだけ支えられているのではなく、こうした驚くべき数にのぼる用具のひとつひとつを整え選び出すことによってもまた支えられていることを知ったのは、驚きであった。

加賀の手漉和紙製作用具は、一二六種四四八点で、これも昭和四九(一九七四)年に重要民俗資料に指定されている。二つのケースに、1、山作業・楮こうぞむし・楮むき・煮熟・川洗い 2、打解・叩解・染色・紙漉き 3、脱水・乾燥・取り込み・断裁・包装に分類されて陳列されている。原料の伐採から製品の包装に至るまでの全製造工程の工程類をいっぺんに見ることがができる。今でも和紙の製造工程をみせてくれるところはあがるが、ここの道具が示す全工程をみる事ができるわけではない。

重要民俗資料としての指定理由を読んで気づいたのだが、この手漉和紙用具は、江戸村の紙漉家とその紙漉場とを合わせた一体として保存され、指定されているのである。園としては用具類を一箇所に集めた方が管理しやすいという事なのかも知れないが、せっかく一体をなしている資料を分離展覧していることには疑念も感じられた。産業考

古学会の会報創刊号に寄せられた久米康生氏の「和紙研究ノート」によると、和紙関係の資料を集積している施設は各地域の郷土資料館など少くないらしいが、用具等を一貫して揃えており、したがって国の重要民俗資料に指定されているのは、この百万石文化園のものと島根県金城町の石州半紙の用具だけのようであるから、陳列の仕方もだいたいにして欲しいと思ったのである。

〔百万石文化園については、『月報・富士』一九七六年六月号の大矢真一「江戸村と檀風苑」の記述が参考になった。記して謝する次第である。〕

三 産業考古学と博物館

国や地方公共団体が設置運営する博物館における産業考古学への関心は、私はその全部を知っているわけではないから正確な断言はできないが、いまのところ、残念ながら決して高いものではないといわなくてはならない。そのなかで、青木国夫氏を中心とした国立科学博物館の機械工学部は当然としても、北海道百年を記念する事業の一環として昭和四六（一九七二）年に開館した北海道開拓記念館は注目に値するように思われる。後者は、「北海道のおいたちから開拓の歴史と、開発への課題を示す諸資料を収集、展示、保存し、北海道の歴史をたずねる」という趣旨（同館のパンフレットによる、傍点は引用者）からして、いわば産業考古学的な課題を正面にすえているということが出来る。

学芸員の陣容もある程度整っており、これまで出された研究年報や調査報告も、産業考古学的な話題を豊富に提供している。たとえば鉱業という分野に限っても、『明治初期における炭鉱の開発——茅沼炭鉱社会における生活と歴史』（調査報告第一号、一九七二年）、『明治初期における炭鉱の開発——幌内炭鉱における生活と歴史』（同第七号、一九七四年）、『北海道における石炭産業史資料の収集・保存とその活用』（『研究年報』第四号、一九七五年）などにその一端をか

いまみることが出来る。近年、府県や大都市でかなり規模の大きな博物館を建設しているので、産業考古学的な方面については、緊急性が切実なだけに、当初からの意図的な充実を期待したい。

産業考古学関係の専門博物館は、じっさいにはかなりの数にのぼる。鉱業の分野で私の知る限りでも、秋田大学鉱業博物館、宇部の石炭博物館、福岡県直方の石炭博物館、佐渡相川の郷土博物館、岐阜県神岡町の鉱山資料館、新潟県出雲崎の石油記念館、日立金属安来工場に付設されている和鋼記念館等々がある。三菱金属の大宮の中央研究所にあった和田コレクションとして知られる大型・中型の鉱物標本も生野に移され博物館として展覧されている。こうして列挙していくと、あれを挙げてこれを挙げる理由は何かなどという問題も起りかねないのでやめにするが、現地に現物を保存するというのも博物館の一つの有力なあり方であるから、廃山廃坑が相継ぐなかで、当然に経営も楽でない筈の企業にこうした方面へ配慮する傾向がみられるようになったことについては、一部では後世への当然の責務だという意見もあるが、自治体でさえないかなかなか手をつけない仕事であるから、やはり敬意を表する必要がある。残念に思うことは、これらの施設の多くが、専門的な知見をもつ学芸員をおくこともなく、小規模に展覧を続けるにとどまっていることである。

もっとも、博物館は人がたくさんいれば充実するというものでないことは、伊藤正和氏がほとんど独力で集積した努力と、その気迫におされて拡張するかたちで支援した岡谷市の蚕糸博物館が、養蚕製糸の機械装置類や関係文書に關する限り断然他に隔絶していることにみられるところで、少数でも研究熱心な人がいることと、その熱意を理解しうる支援者のいることが重要な要素となっているようである。

和鋼記念館は昭和一八（一九四三年）に開設された比較的歴史のある博物館で、旧来の砂鉄製錬に関する用具や原料、製品、それに関係文書多数を収集し、また、たたら炉の模型を設置している。その用具二五〇点は国の重要民俗

資料に指定されている。和鋼記念館は充実した博物館の例によくあげられるのだが、よく考えてみればこれは大正期まで稼動していたとはいえ、現代の製鉄、製鋼法に直接につながる技術体系ではない。

現代に直接に接続している技術体系について産業考古学的な資料を収集あるいは保存することは、やはり何といっても今後の課題なのである。直方の石炭博物館の展示資料をみたときに感じた何とはなしの乱雑さは、この課題のむつかしさだったのかもしれない。ごく最近になって私は、日立鉱山(株)が古くから現代に至るまで、岩機を各型式・各年代ごとに二〇七台も保管していることを知った(日本鉱業会「わが国鉱山における機械化過程の調査研究」一九七七年)。さく岩機ひとつをとりあげてもこれだけにのぼるところに、一私人、一企業のわくを超さずにはおかない産業考古学的な研究のむつかしさがあることを考えさせられたが、それが現代の課題の一つであることを改めて思わないわけはいかなかった。

(名古屋大学 助教授)